教育センター通信

火床（ほど）の火の心を紡ぐ

第５号（通算６６号）
令和元年９月 24 日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター　発行

星　空　教　室
（しらさぎ森林公園）
9月6日（金）

眠育のすすめ

小中一貫教育推進課　指導主事　小林　貴英

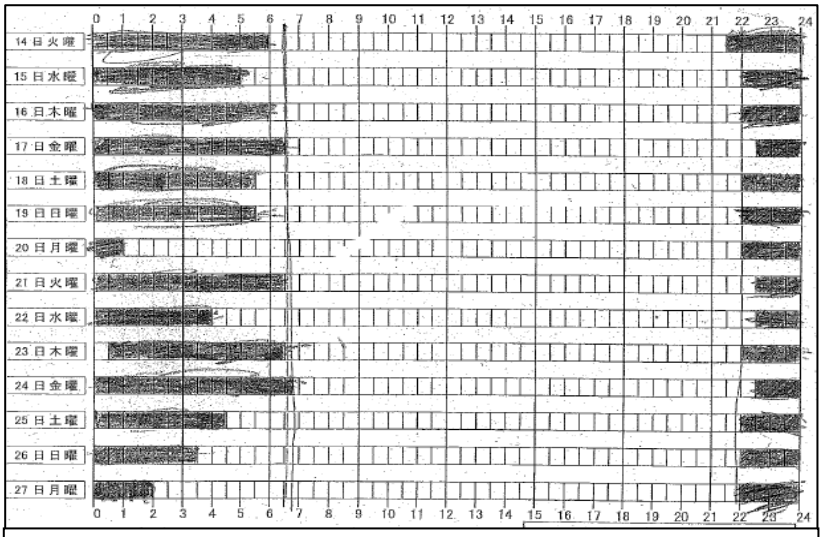
適切な睡眠の条件は３つです。

1　睡眠時間帯（タイミング）：夜７時から朝７時までの間
2　睡眠時間（量）：中途覚醒がなく次の時間を確保　小学生８～10 時間　中学生７～９時間
3　リズム（質）：入眠、起床時刻にばらつきがない。（前後 30 分以内は許容範囲）
＊リーフレット「『眠育』のすすめ」より（毎年４月配付）

三条市では眠育の啓発活動として、妊娠期と乳幼児期、小中学校在学時にリーフレットの配布等を行っています。また、保育所等及び小学校、子育て拠点施設、図書館には、「ねこすけくんなんじにねたん？」という絵本を設置しています。

眠育モデル地区として、四つ葉学園と三条おおじま学園が２年目の取組を行っています。また、３年目の取組を実施している瑞穂学園の児童生徒は、生活リズムが明らかに改善されてきています。

三池輝久先生（熊本大学名誉教授）による第２回講演会を 11 月 28 日（木）に栄庁舎で開催します。多くの方から関心をお寄せいただきたい事業です。



〈睡眠時間調査　５年生の例〉
眠育調査期間（２週間）の睡眠時間を塗りつぶします。上表の児童は、直ちに受診が必要であると判断されました。その後、家庭での継続的な働きかけもあり、現在は規則正しい生活を取り戻しています。

「わくわく科学フェスティバル」に約１０００人来場!!

８月７日(水)、栄体育館・農村環境改善センターを会場に、第 15 回「わくわく科学フェスティバル」を開催しました。今年度は全部で 15 のブースが出展し、来場者は 967 人となりました。来場者が 900 人を超えたのは、平成 24 年以来です。

「エアーフィッシング」「ひんやりカイロ」「有孔虫化石の標本プレパラート」「レゴとＶＲで建設機械操作体験」「ウグイス笛づくり」「割りばし鉄砲づくり」「ストローロケット」「ペーパーブーメラン」など、新しい内容のブースもたくさんありました。また、「アイスキャンディーづくり」や「スライムづくり」など、例年人気のあるブースも賑わっていました。訪れた子どもはもちろん、保護者の皆様も、ものづくりや科学の体験活動を楽しんでいました。

来場者のアンケートから感想を紹介します。

・わりばしでっぽうのむずかしいやつをつくりたいです。（小２年）
・私は、11番がとても楽しかったです。紙を折るところがたいへんだったけど１時間くらいかけてやったら、とてもきれいにランプシェイドができてうれしかったです。また来たいと思いました。(小５年)
・去年とちがったものをすることができて楽しかったです。いろいろなことを学べたので良かったです。また来たいです。(小６年)
・標本プレパラートにはまりました！子どもと楽しいひとときをありがとうございました。また来年もよろしくお願いします！（保護者）

長く続いてきたイベントですが、多くの来場者から肯定的評価をいただき、「また来たい。」と言っていただけることはありがたいことだと思います。今後も、おいでいただいた方々が、科学にふれて、親しんでもらえるようなフェスティバルにしていきたいと考えています。

10 分の１　組立模型　雪国の家の耐震構造

ＶＲとレゴで建設機械操作体験

有孔虫化石の標本プレパラートつくり

割りばし鉄砲、作って遊ぼう

授業力向上実践研修(Step1, Step2 研修)　がんばっています!!

今年度の受講生は「Step１研修(教職経験２年目～5 年目)」が 31 名、「Step２研修(教職経験７年目～10 年目)」が 13 名の、計 44 名です。

本研修が始まった平成 16 年度以後、最も多くなりました。教員にとって授業力向上のための研修は必須です。多くの若手教員が、意欲をもって参加していることに、喜びと頼もしさを感じています。

本研修の特徴は「１年間にわたる長い研修」「自分で計画的に進める研修」「一人一人に担当指導主事が付く研修」の３つです。５月のガイダンスを経て受講生は研修計画を作成し、これまで３回にわたり「授業づくり入門学習会」、「教育研究論文作成学習会」を受講してきました。「Step1 研修」では授業づくりの基礎を学ぶ中で授業力を高める基礎的な研修を、「Step2 研修」では教育研究論文作成を中心に自身の授業の課題を探りその解決を目指した研究を進めていきます。さらに、２学期には研究授業を公開し、まとめとして「授業づくり実践記録」、「教育研究論文」執筆します。

授業力向上実践研修をとおして授業に正対し、指導力に磨きを掛け、受講者それぞれが掲げる「授業にかける願い」が実現されていくことを期待しています。

※写真は「Step１研修 第３回学習会(8/22)」の一コマ

全国学力・学習状況調査分析研修

この研修は、各学校で全国学力・学習状況調査の結果分析を進めたり、２学期からの授業改善を図ったりすることをねらい、８月 20 日（火）に行いました。「問題別（解答類型）調査結果」を基に、問題ごとに「正答率」「有意味誤答率」「無意味誤答率＋無答率」を算出し、４つの観点から結果を分析しました。そして、問題視すべき点を捉え、その背景を考察し、改善の方策について意見交換しました。

（各自が自校のデータを整理し分析しています）

（結果の背景を考察し改善の方策を考えています）

（受講者の声）

- 分析方法が分かりやすく、焦点化しやすかった。誤答の傾向から子どもたちへの指導について考えていきたい。また、校内の職員と共通理解を図りたい。
- 一問一問をこのようにじっくり見ていく機会が日頃少ないので、こういうことは一見手間もかかりますが、日々の授業を工夫する新たな視点をもつために大切にしていきたいです。
- 授業改善のアイデアをたくさん聞いてみたかったと思います。最後の話合いの時は４人くらいのグループにしてはどうかなと思いました。

吃音（きつおん）のあるお子さんに、どのように関わっていますか？

小中一貫教育推進課　生方清司

吃音のあるお子さんに、慌てているのではと感じ、「落ち着いて」とか「ゆっくりでいいよ」と声をかけていませんか。相手を気遣っての声がけですが、この対応で嫌な思いをしている吃音のあるお子さんもいます。吃音について確認していきましょう。

1　吃音のタイプ

吃音にはいくつかのタイプがあります。例えば「あのね」という時に、
「あああのね」と言ってしまう「くり返し（連発）」、
「あーーのね」と伸ばして言ってしまう「引き伸ばし（伸発）」、
「ん・・・あのね」とつまってから言う「ブロック（難発）」があります。

また、話し出す時に、首を振ったり、体を叩いたりする等、体が動いてしまう「随伴症状」といったものもあります。自分からそのようにしているのではなく、そのようになってしまうのです。

連発→伸発→難発→随伴症状と症状が重くなります。症状が重くなるにつれ話しにくくなります。

2　吃音の症状と原因

吃音の症状は、言葉の使用が増える2～3歳ごろから始まることが多く、自然になくなることもあります。また、調子のいい時とそうでない時の波があり、場面・相手・季節・体調・ことば・行事・環境等、様々な条件に影響されます。

また、吃音の原因については様々な立場から研究されていますが、確かな原因はまだ分かっていません。

3　どのように関わったらいい？

さて、実際に吃音のあるお子さんとのコミュニケーションはどうしたらよいでしょう。

吃音のあるお子さんが「ちちちいさい　ねーーこが　ん・・・きたよ（小さい猫が来たよ）」と話しかけてきた時の対応とそれに対するお子さんの気持ちを考えてみましょう。

①「落ち着いて。」「ゆっくりでいいよ。」と言う。

（猫が来たことを伝えたかったのに、なんでそう言うの…。）

②待ちきれず「小さい猫が来たのね。」と言う。

（ぼくが言いたかったのに、何で言っちゃうの…。）

③「本当だ。小さい猫が来たね。」と子どもの言い終わった後で言う。

（話を聞いてもらえた。もっと話したいな。）

吃音のあるお子さんの気持ちを考えると、③の様に、話の中身を聞き、その中身を返してあげると、会話が進んでいきます。話したい気持ちを育てることにもつながります。

更に、ゆっくり話すと吃音が出にくいことが経験的に分かっています。ゆっくり話しかけると、ゆっくり返事ができ、スムーズに話しやすくなります。また、複数で一緒に発表するようにすると、スムーズに話せることが多いです。

※　吃音で困っている場合、裏館小学校にある「ことばの教室」で相談することができます。